寶泉寺書院（旧服部家住宅書院）国登録有形文化財 23-0310 号

庭園は、茶道松尾流第十代・不染斎宗吾の指導によって造られている尾張の庭の典型的なもの。尾張の庭は、自己主張しないで日々の生活に溶け込むように造られている。

この庭の特徴は、茶室にのぞむとき蹲踞が少し下がったところにあり、動きが立体的で、深みを見せているところ。

寶泉寺　浄土宗西山禅林寺派（本山は京都東山永観堂禅林寺）

開創は天文年間中（１５３２～５５）と伝わるが、開山喜叟玄悦上人は天文四年歿のため、また墓地内に大永四年（１５２４）の宝篋印塔があるため、それ以前にさかのぼることは間違いない。また善光寺如来を招来したのが、大永年間であることも、その裏付けとなる。また、永正年間の建立の説もあるので、ほぼ 500 年前のこととなる。

池麸町は、以前「池之堂町」と「麸屋町」に分かれていた、池之堂の地名は、昔、宝泉寺に池があったので、池のあるお堂ということで、その名が付いたという。別の説では、池を埋め立ててお堂を作ったというのもある。弁天堂があるが、これは池の中に建てられるので、おそらく池があったのであろうと推測される。

書院には、二つの空間があります。

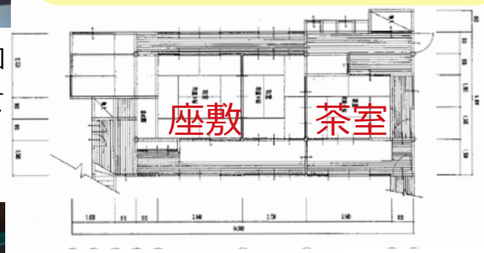
和らいだ空気が気持ちを落ち着かせる茶室。

無駄のない空間美があり、凛々しさを感じさせる座敷。

この二つの異なった世界が共存しているのが特徴です

座敷の床柱は、細身の四方柾。周囲の柱より細いことで緊張感が生れている

茶室の床柱は、節付き丸太。床框は、松尾流の好みとされる「なぐり」になっている



茶室南側にある無双窓は、一枚板に楕円形の窓を開けたもの。優しさを感じる　→

← 座敷南側にある無双窓は、短冊形の板を並べたもの。直線の美がある

座敷側と茶席側を仕切る戸は、２つの表情がある

← 座敷側は、すっきりとした板戸

→ 茶室側は網代張りの意匠となっている

宝泉寺書院は、双子の書院

津島の豪商「笹秀」が明治中期に建築されたこの書院は、昭和５年（１９２９年）に、故･服部秀助氏によって、厨子（現在の津島市本町四丁目）の地から宝泉寺に移築されたものです。

移築後、ほぼ同じ書院「清風」を松尾流十代不染斎宗吾氏の指導で建築したので、全国的にも珍しい双子の書院となっています。

移築後、ほぼ完全な状態で維持保存されています。

データ：記録保存：寶泉寺書院